

※イラストはイメージです。



Special Interview

玉井 浩 教授
大阪医科大学[小児科学/LDセンター センター長]

たまひひろし 1979年、大阪医科大学卒業。88年米オハイオ州立大学、サル薬品研究所、90年大阪医科大学助手、95年講師、96年より現職。日本ダウン症療育研究会会長、日本小児栄養消化器肝臓学会理事長、日本ビタミン学会理事などを兼任。

「学習障害(LD)」という
と、学習面でマイナスのイメージを抱く人がいますが、完全な誤解です」
LDの原因が脳機能にあることは以前から分かっているが、理解力に問題があるので、学ぶプロセスに必要な働きが、他の子供と違うことが多いようだ。
例えば「自分の言葉ではしゃかり話すことができるのに、教科書の音読が苦手な子は、文字を目で追っていく作業が上手ではなかったり、読み取った文字を発声するのが苦手だったりするケースが多いのです」。特に日本語では、読み取った文字を正確に発声するという一見単純な行為にも、非常に複雑な脳の働きが必要だ、と玉井は言う。
同級生に比べてそうした作業に時間がかかると、本人が劣等感を持ってしまい、勉強そのものを嫌いになってしまうやうい。本当は条件さえそろえてあげれば、きちんとできる子なのに、才能を十分に発揮することができない子供は玉井は多く見てきた。
まだLDに対する社会的理解がそれほど広がっていない

誤解されがちなLDの本質見極め
専門機関を開設

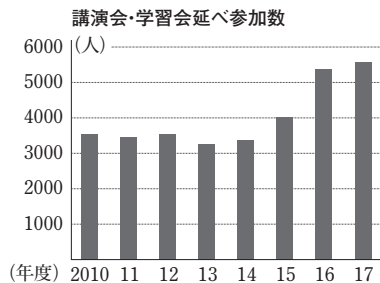
子供の学校などでの学習進度・行動に頭を悩ませる親は少なくない。大阪医科大学の小児科
学教室、玉井浩教授は2001年、日本でまだ珍しかったLD(学習障害)センターを立ち上げ、
子供のケアに取り組んできた。社会の理解が着実に広がっている。

子供を勉強嫌いにさせないために

ころから、玉井は専門機関であるLDセンターをいち早く開設し、こうした子供たちと向き合ってきた。今では立派な社会人に成長したかつての教え子が顔を出すようになって、それが何よりの楽しみだ。

医療と教育の連携
実を結ぶ啓発活動
ICT活用も一手

授業や手術で治療できる原因のLDなら、医療機関が責任をもってケアすべきだと玉井は考えている。しかし現実にはそうした症例はほとんどない。「センターでも言語聴覚士などの専門家をそろえてトレーニングを提供してはいますが、子供が学習する場として最も長い時間を過ごすのは、学校などの教育機関です」。玉井の精力的な啓発活動の成果もあって、LDに対する理解は広がり、現在では全国から年間5千人を超える学校関係者や親が、講演会などに参加している。
それでも玉井は満足していない。「学校には過度な平等意識があつて、特定の子供に必要な配慮ができていない。板書の苦手な子供がいたら、電子黒板を使う方法もあるし、タブレット端末を用意してあげてもいい」と、教育現場での情報通信技術(CTC



工)の活用が、子供の学習効率を上げる可能性を説明する。タブレットをクラス全員に配布して、LDの子供向けの端末には文字を大きくするような工夫があるといい。
LDという診断を受けてしまうと、親がショックを受けてしまうことも少なくない。「だからこう話すんです。あなたは将来の大人物の母になってください」と。子供のころLDなどで苦労した人が、著名な経営者や建築家に成長するケースもあるという。弱い点をカバーするため、日々積み上げてきた努力が、独自の発想やモノの見方を育てる力に繋がっているのかもしれない。
昨年、小児高次脳機能研究所を立ち上げた。玉井らがこれまで積み上げてきた知見を生かして、子供たちの未来を切り開こうという狙いだ。そこには、LDに関心を持たなかった企業との接点を増やしたいという願いもある。

学校法人 大阪医科薬科大学

Educational Foundation of Osaka Medical and Pharmaceutical University

www.omp.ac.jp

法人広報室 / TEL: 072-684-6817

過去の連載記事は上記サイトに掲載

大阪医科大学(医学部・看護学部) 〒569-8686 大阪府高槻市大学町2番7号 / TEL: 072-683-1221(代表)

大阪薬科大学(薬学部) 〒569-1094 大阪府高槻市奈佐原4丁目20番1号 / TEL: 072-690-1000(代表)

高槻中学校・高等学校 〒569-8505 大阪府高槻市沢良木町2番5号 / TEL: 072-671-0001(代表)

医療フロントライン

11

Frontline Medical Care